上田星邨旧蔵の書画コレクションについて

土居聡朋
長井健

はじめに ― コレクションの概要

令和二年（二〇二〇）度、当館では愛媛県西宇和郡伊方町出身の書家・上田星邨（一八九六～一九八八）によって収集された書画二四点について、ご遺族より寄贈を受けることとなった。その内容は、公家・歌人・国学者・書家等による鎌倉時代から昭和時代までの書作品及び星邨と直接交流のあった同時代の日本画家による絵画作品など、幅広く特色あるコレクションとなっている（表1）。特に注目すべきは、藤原定家の日記「明月記」断簡（№1）で、調査の結果、建久九年（一一九八）二月十九日条の一部と判明し、直筆の新出資料であることが確認された。さらに、これらの作品に加えて、約四〇点の関連資料も寄贈いただいた。

星邨は、はじめ京都市立絵画専門学校（現・京都市立芸術大学）で日本画を学び、都路華香（一八七一～一九三一）や菊池契月（一八七九～一九五五）に師事した。その後、京都帝国大学教授だった国文学者・吉澤義則（一八七六～一九五四）に師事し、昭和七年（一九三二）頃よりほぼ独学で書の道に入った。戦中から戦後にかけては、「古今和歌集」「和漢朗詠集」「西本願寺本三十六人集」などの中世の古筆・料紙装飾の研究者としても活動し、多くの論考を残している。戦後は、日本書芸院、日本書道美術院、読売書法展の審査員をつとめ、昭和四三年（一九六八）には平安書道会の第五代副会長に就任した。

なお本コレクションには、収集した書画以外にも、こうした星邨の経歴をうかがわせる作品も含まれる。例えば、自らが制作した料紙に、師事した吉澤義則や歌人・加藤義清（一八六四～一九四一）が書をしたためた作品（№8、11、12）や、星邨自筆の仮名書作品（№13）などがそれである。では以下、特筆すべきいくつかの作品について詳しく紹介することとしたい。

（長井）

書跡コレクション

（1） 藤原定家「明月記」断簡（№1）

藤原定家（一一六二～一二四一）は、平安時代末期から鎌倉時代前期の公卿、歌人。勅撰和歌集「新古今和歌集」「新勅撰和歌集」を撰したほか、歌学歌論や古典研究の面にも大きな足跡を残した。嫡子為家を生んだ定家の後妻は、伊予国知行国主の地位及び宇和荘領主職等を通じて伊予国を重要な所領の一つとしていた西園寺公経の姉であり、また、為家の妻は伊予国守護・宇都宮頼綱の娘であった(1)。

定家の日記「明月記」は五六年間に渡る克明な日記で、大部分は冷泉家時雨亭文庫に所蔵（国宝）されているが、原本の一部は早くから流出し、断簡、掛け軸などとして諸家に分蔵されているものも少なくない(2)。本断簡は、先学の所在調査ではその存在が確認されていなかった新出の原本資料である。

本断簡は軸装されており、宮内庁図書寮御用掛等を務めた猪熊信男（一八八二～一九六三）の箱書がある。本紙は縦二八・五センチメートル、横一四・四センチメートル。残存本文は七行。墨界は無い。料紙は楮。右端は紙を引きはがしたよ

うな痕跡があり、天地と左端は切断されている。

【釈文】

（前欠）

如［　　］

被寄御車之間、取御劔之儀同不似存、是

吾僻事歟、不知事也云々、

又云、親經自翌日出仕、更不籠居、

公國又籠居云々、去年出現、今度

籠居是何故乎、尾籠之極也、

又云、高通等昇殿數輩相加云々、

（後欠）

【箱書】

（表）藤原定家卿明月記断簡　□云々

（裏）定家卿の日記明月記の断簡にして世にこれを記録切といふ

猪熊信男（花押）証之

その内容から、建久九年（一一九八）二月十九日条の一部であり、『穠翠亭神戸家所蔵品売立』（大正一三年四月九日、名古屋美術倶楽部）掲載の「国基書状」の紙背に見える建久九年二月十九日条前欠断簡の直後の部分であることが判明する(3)。ただし本断簡には紙背文書は無い。右端及び上部の一部の紙が薄く欠損があり、相剥ぎにより紙背文書が切り離されたものと考えられる。わずかに墨書の跡が見受けられるのも、かつて紙背文書が存在したことを裏付ける。尾上陽介氏は、『明月記』原本の様式を大きく三種に分けており、建久七年から建仁二年（一二〇二）の間は、書状の反故を裏返して再利用し罫線を引かずにそのまま記事を書きつけたものであることを指摘しているが(4)、本断簡も同様の様式である。

本断簡は後鳥羽上皇の石清水八幡宮等御幸に関する近衛府の諸氏の動向、藤原親経、藤原公國、藤原高通らの出仕等についての記載がある。本文は従来から写本で知られているものと同文であり、その意味で内容的に歴史的な新知見は見られないが、後鳥羽上皇の石清水八幡宮から鳥羽殿への御幸時の状況に係るこれまで知られていなかった明月記原本の一部が今回発見されたことは誠に貴重であり、また定家様の書跡が確認できることも価値が高い。

なお、本書跡の調査に当たっては、冷泉家時雨亭文庫調査主任　藤本孝一氏及び東京大学史料編纂所　尾上陽介氏・井上聡氏からご教示を得た。

（2）『古今和歌集』巻十一断簡（№2）

「古今和歌集」巻十一、恋歌一、五五〇・五五一番歌。軸装、紙本墨書。本紙は縦二三・六センチメートル、横五・七センチメートル。五五〇番歌の頭右肩等に朱合点を施す。

【釈文】（／は本紙の改行部分）

あはゆきの　たまれはかてに　くたけつゝ　わか物思の　しけきころか／な

おくやまの　すかのねしのき　ふるゆきの　けぬとかいはむ　こひ／のしけき

／に

伝承筆者やツレも不明であるが、鎌倉時代後期～室町時代前期の写本とみなせるとの指摘を受けている(5)。時期の古い『古今和歌集』写本断簡の一つとして貴重である。

（3）夏目漱石五言絶句（№10）

夏目漱石（一八六七～一九一六）は、近代日本の作家。明治二六年（一八九三）帝国大学英文科卒業後、同二八年四月に愛媛県の松山中学に赴任、第五高校の教

師を経てロンドンへ留学。帰国後、東大講師となる。『吾輩は猫である』によって文壇に登場後、明治三九年に松山中学時代の経験を下敷きとした『坊つちやん』を発表。四〇年朝日新聞に入社し専属作家となった。『三四郎』『それから』『門』などのほか、大病を経て『こゝろ』『道草』『明暗』などの作品を残した。その一方、伝統的な漢文教育を受け素養があったことや、大学予備門での正岡子規との交流が契機となり、松山中学赴任前から漱石が没する大正五年まで二百首を超える漢詩を残し、高い評価を得ている(6)。

本品は軸装されており、本紙は絖本、縦四一・一センチメートル、横二八・二センチメートル。

【釈文】(／は本紙の改行部分)

隔水東西住
閑／雲往也還
東家／松籟起
西屋竹／珊々

題自畫　漱石（印）

漱石の漢詩は二〇八首が『定本　漱石全集　第一八巻　漢詩文』(7)に収録されているが、このうち№一二七に該当。「自画に題す」とあるとおり、もとは漱石自筆の絵に添えられた詩文である。『全集』によれば、自筆の書が三種知られているほか、大正五年初夏と推定される手帳にも筆記があるとされるが、本作品は『全集』には未所収の新出資料である。

『全集』では№一二七を大正四年四月の作とする。本作では「閑雲」となっている部分が、『全集』で知られる三種の書では「白雲」となっている。同書の訳注によれば、大正五年初夏と推定される手帳には「閑雲」と記されているとされ、本作品と一致する。ただし『全集』によれば、手帳では「復」となっている部分が、本作では既知三種の書と同じ「也」となっており、本作は大正五年の手帳の文言と完全に一致しているわけではない。なお、本作の落款印「漱石」は、神奈川近代文学館が漱石中期の水彩画的日本画から「秋景山水図」(同館蔵)をはじめとする晩年の南画風の作品まで数多くの書画の落款に用いられたものとする(8)印であるが、本作品では誤って右横向きに捺されている。

黒田眞美子氏は、漱石の現存する漢詩を四期に分けている(9)が、本作品の制作時期と目される漱石晩年の大正四年四月～五年初夏頃は、同氏の分類による第三期「南画趣味時代」(明治四五年五月～大正五年春)の末期に相当する。大正四年三月、京都旅行の際に胃潰瘍で倒れ、同四年六月から九月まで「道草」を連載、大正五年一月には湯河原に転地し、大正五年五月から「明暗」の執筆が開始される時期にあたる。

なお、本作品の調査にあたっては、新宿区立漱石山房記念館のご協力を得た。

（土居）

絵画コレクション

（1）都路華香（№15、16）

華香は、京都の生まれ。九歳で四条派の幸野楳嶺（一八四四～九五）に入門し、菊池芳文、竹内栖鳳、谷口香嶠とともに「楳嶺門下の四天王」と称された。さまざまな展覧会で活躍する一方、教育者としても近代京都画壇の隆盛を支えた。明治四十年（一九〇七）の文展開設にあたり第一回展から出品、大正八年（一九一九）の帝展改組後は、審査員をつとめた。四条派の画風を基盤に、建仁寺の黙雷禅師に参禅して得た精神性を交え、新技法を積極的に取り入れたその画風は、近年はアメリカをはじめ海外にもコレクターが多い(10)。

華香は、明治四十三年（一九一〇）に京都市立絵画専門学校の嘱託講師となって以降、教諭、教授を経て、大正十五年（一九二六）には同校校長に命じられた。星郁は同校で華香に学んでおり、本コレクションに含まれる華香作品二点は、本

人から直接譲られたものと見られる。《水墨山水図》（№15）における円窓形の縁取り、たらしこみ風の水墨技法、細かな小波の表現、また《曙雲群鴉図》（№16）の色面の広がりで示す雲の表現、群れ飛ぶ鳥のモチーフは、明治末期～大正初期（一九一〇年代）に多く描かれており、この二点も同時期の作と推測される。星郁の在学中に入手した可能性もあろう。

（2）真野暁亭（№17～23）

暁亭（一八七四～一九三四）は、東京の生まれ。十一歳で河鍋暁斎（一八三一～一八八九）に入門、父も暁斎の門人であった。飯島虚心著『河鍋暁斎翁伝』では、暁斎没後は久保田米僊（一八五二～一九〇九）に師事したと伝える。明治二十七年（一八九四）の第九回日本絵画協会・第四回日本美術院連合絵画共進会で《祇王祇女》が二等褒状を受賞。その後も展覧会への出品を重ねる。画業初期は、暁斎を踏襲した奇抜な作品も見られるが、東洋画の伝統に則った画題が多く、もの静かだったという人柄を示すように、静寂さの漂う洗練をみせる作品を手掛けている。

なお、次男の真野満（一九〇一～二〇〇一）は、星郁とは京都市立絵画専門学校の同級生にあたり、星郁はこの縁で、暁亭の娘（満の妹）と結婚している。同校卒業後は、安田靫彦に師事し、院展で活動。昭和十五年（一九四〇）に始まった法隆寺金堂壁画の模写事業に参加、中村岳陵の班で5号壁を担当したことでも知られる。

本コレクションに含まれる暁亭作品七点は、いずれも瀟洒淡泊な小品ではあるが、河鍋暁斎記念美術館所蔵の一連の作品とも画題・作風も通じており、小気味よい筆さばきは暁亭独自のものである(11)。結婚後、親族となった縁で暁亭本人から譲られたものと見られ、親密な関係がうかがわれる。

（長井）

結び

以上、本コレクションは日本書道史上貴重な資料が含まれており、当館における書・文学関係の収蔵作品・資料をさらに充実させ、一体的に活用しうる内容を持つものである。また本県出身の作家によるユニークな収集であるところから、書家であり研究者でもある上田星郁その人の再評価にも繋がるものである。なお、今回あわせて寄贈いただいた関連資料の中にも、現時点では制作年代や筆者が断定できないままのものがある。今後も継続して調査を行い、本コレクションの評価や位置づけをさらに高めていければと考える次第である。

（長井）

註

（1）西園寺氏と伊予との関わりについては石野弥栄「西園寺氏の伊予下向土着の前提について－西園寺氏の勢力基盤－」『伊予史談』二六七、伊予史談会、一九八七年参照。宇都宮氏と伊予との関わりについては土居聡朋「伊予宇都宮氏の成立と展開」市村高男編『中世宇都宮氏の世界：下野・豊前・伊予の時空を翔る』彩流社、二〇一三年を参照。

（2）①「『明月記』原本及び原本断簡一覧」（『明月記研究提要』所収、八木書店、二〇〇六年）、②尾上陽介『断簡・逸文・紙背文書の蒐集による「明月記」原本の復元的研究』（東京大学史料編纂所研究成果報告二〇一二・七）、二〇一三年

（3）註（2）②、尾上陽介氏及び井上聡氏のご教示による。

（4）尾上陽介『中世の日記の世界』山川出版社、二〇〇三年

（5）藤本孝一氏及び伊井春樹氏に本資料を実見いただき、所見を得た。

（6）吉川幸次郎『漱石詩注』岩波書店、二〇〇二年

（7）夏目金之介『定本　漱石全集　第一八巻　漢詩文』岩波書店、二〇一八年。以下『全集』という。

（8）神奈川近代文学館ホームページ「夏目漱石デジタル文学館」印章の部、同館資料番号八一〇／二五四

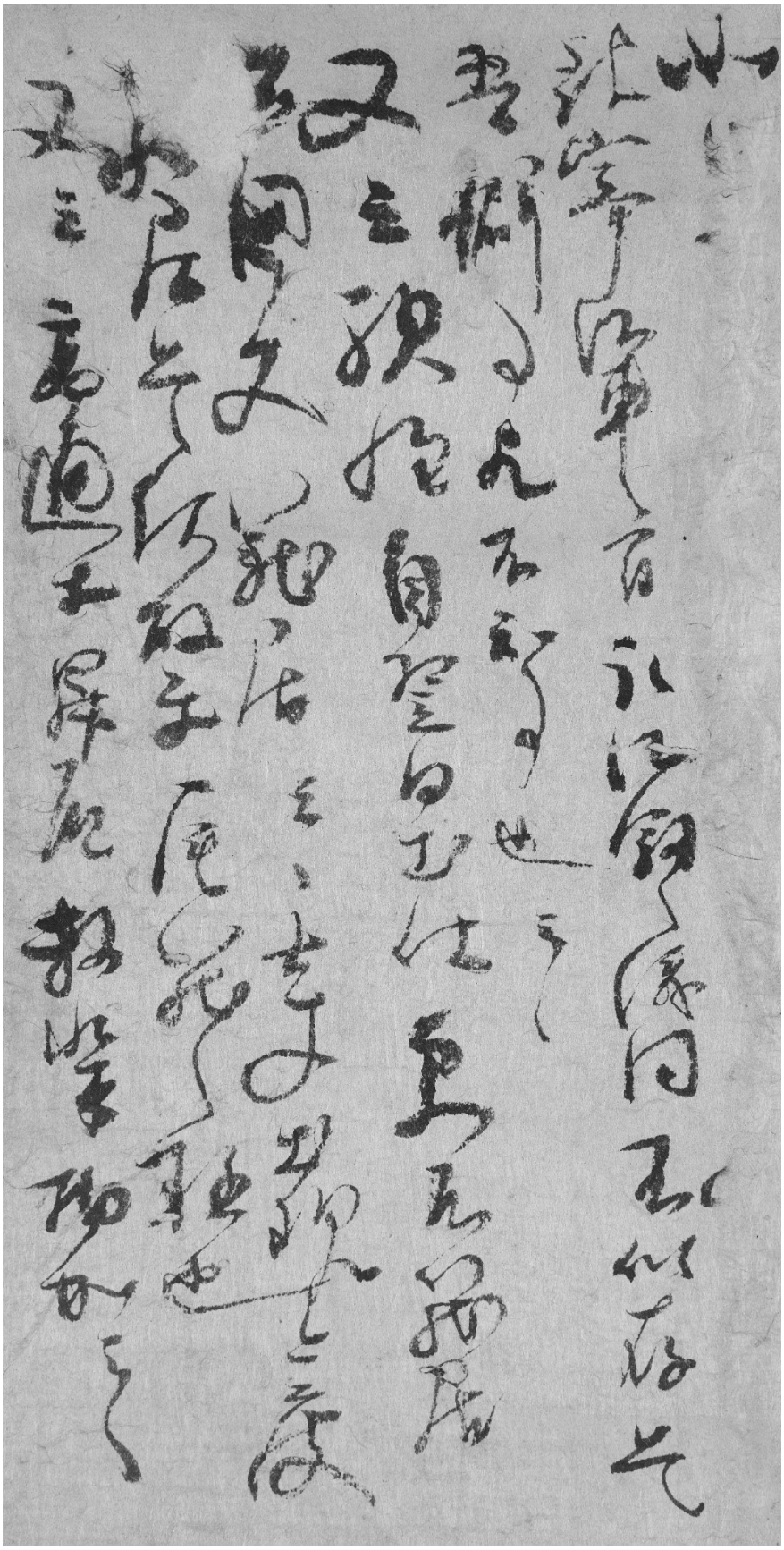
（9）黒田眞美子「夏目漱石の中国文学需要：南画趣味時代の漢詩を中心として」（上篇・下篇）『日本文学誌要』九五号・九六号、二〇一七年

（10）『都路華香展』図録、京都国立近代美術館、笠岡市竹喬美術館、二〇〇六～七年

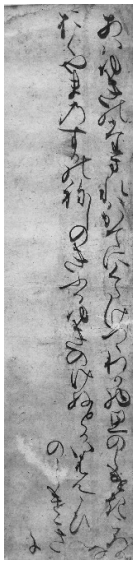
（11）『日光をめぐる画家　河鍋暁斎と門人たち　真野暁亭を中心に』図録、小杉放菴記念日光美術館、二〇〇一年

表１　上田星邨コレクション一覧

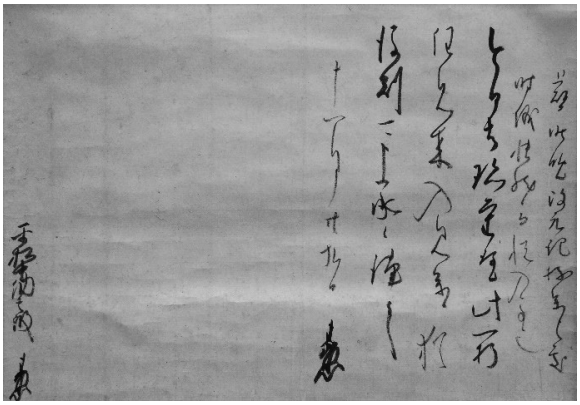
№.	作家名（生没年）	作品名	制作年	材質技法	寸　法（縦×横／cm）
1	藤原定家 （1162［応保2］－1241［仁治2］）	「明月記」断簡　建久9年2月19日条	鎌倉時代・建久9年（1198）	紙本墨書・軸	28.5×14.4
2	作者不詳	「古今和歌集」巻十一断簡（あはゆきの）	鎌倉時代後期～室町時代前期	紙本墨書・軸	23.6×5.7
3	近衛基熙 （1648［慶安元］－1722［享保7］）	消息	江戸時代中期	紙本墨書・軸	31.0×44.5
4	太宰春台 （1680［延宝8］－1747［延享4］）	七言絶句	江戸時代中期	紙本墨書・軸	124.4×48.3
5	江馬天江 （1825［文政8］－1901［明治34］）	蘭自画賛	明治時代	絹本墨画墨書・軸	17.8×14.9
6	日下部鳴鶴 （1838［天保9］－1922［大正11］）	七言絶句	明治－大正時代	紙本墨書・軸	130.5×52.1
7	阪正臣 （1855［安政2］－1931［昭和6］）	和歌　ひとむらの	明治時代	紙本墨書・軸	132.1×30.1
8	加藤義清 （1864［元治元］－1941［昭和16］）	和歌懐紙（上田星邨料紙）	昭和時代初期	紙本墨書・軸	35.2×46.5
9	長尾雨山 1864［元治元］－1942［昭和17］）	七言絶句	昭和14年（1939）	紙本墨書・軸	131.3×32.6
10	夏目漱石 （1867［慶応3］－1916［大正5］）	五言絶句	大正4－5年（1915－16）頃	紙本墨書・軸	41.1×28.2
11	吉澤義則 （1876［明治9］－昭和29［1954］）	和歌　いなつまの（上田星邨料紙）	昭和時代初期	紙本墨書・軸	29.1×38.0
12	吉澤義則 （1876［明治9］－昭和29［1954］）	和歌　ゆふくれの（上田星邨料紙）	昭和時代初期	紙本墨書・軸	17.8×14.7
13	上田星邨 （1887［明治20］－1988［昭和63］）	万葉集　山部赤人の歌（自作料紙）	昭和時代	紙本墨書・額	20.3×123.0
14	立林何帛 （生没年不詳）	朝顔図	江戸時代中期	絹本着色・軸	88.1×30.6
15	都路華香 （1871［明治3］－ 1931［昭和6］）	水墨山水図	明治時代後期－大正時代	紙本墨画・軸	39.7×46.1
16	都路華香 （1871［明治3］－1931［昭和6］）	曙雲群鴉図	明治時代後期－大正時代	紙本淡彩・軸	118.8×30.7
17	真野暁亭 （1874［明治7］－1934［昭和9］）	班女図	明治時代後期－大正時代	紙本墨画淡彩・軸	126.1×33.2
18	真野暁亭 （1874［明治7］－1934［昭和9］）	童子逍遥図	明治時代後期－大正時代	紙本墨画淡彩・軸	134.4×33.2
19	真野暁亭 （1874［明治7］－1934［昭和9］）	羅漢図	明治時代後期－大正時代	紙本墨画淡彩・軸	133.6×33.2
20	真野暁亭 （1874［明治7］－1934［昭和9］）	化生水鏡図	明治時代後期－大正時代	紙本墨画淡彩・軸	125.8×30.3
21	真野暁亭 （1874［明治7］－1934［昭和9］）	鼈図	明治時代後期－大正時代	紙本墨画淡彩・軸	120.1×32.5
22	真野暁亭 （1874［明治7］－1934［昭和9］）	唐美人図	明治時代後期 - 大正時代	紙本墨画淡彩・軸	116.3×30.0
23	真野暁亭 （1874［明治7］－1934［昭和9］）	釣童図	明治時代後期－大正時代	紙本墨画淡彩・軸	116.5×29.9
24	草刈樵谷 （1892［明治25］－1993［平成5］）	風帆遠望図	昭和時代	紙本墨画淡彩・軸	41.2×33.5



No.1　藤原定家『明月記』断簡　建久九年二月十九日条

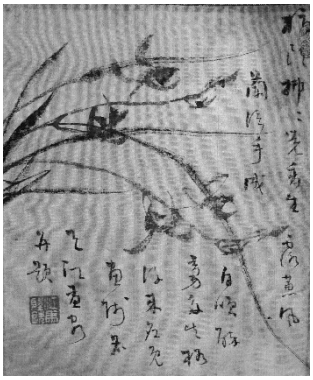


No. 2　『古今和歌集』巻十一断簡（あはゆきの）

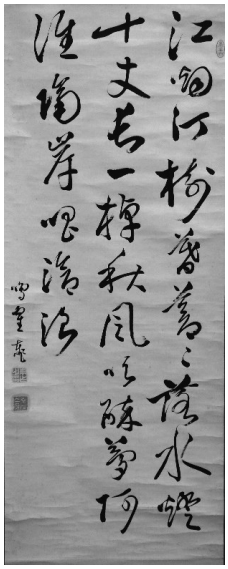


No. 3　近衛家熙《消息》

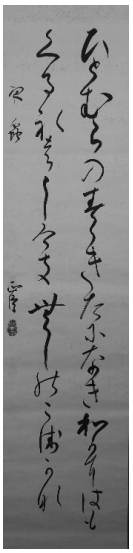
No. 4　太宰春台《七言絶句》



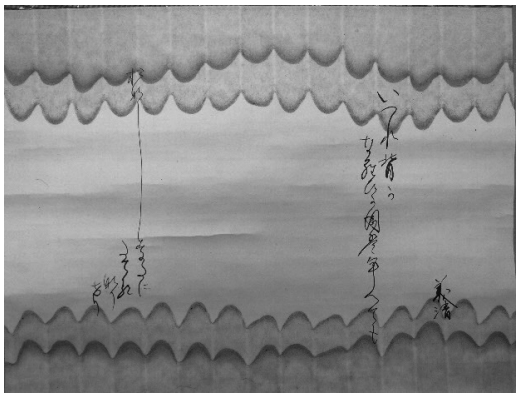
No. 5　江馬天江《蘭自画賛》



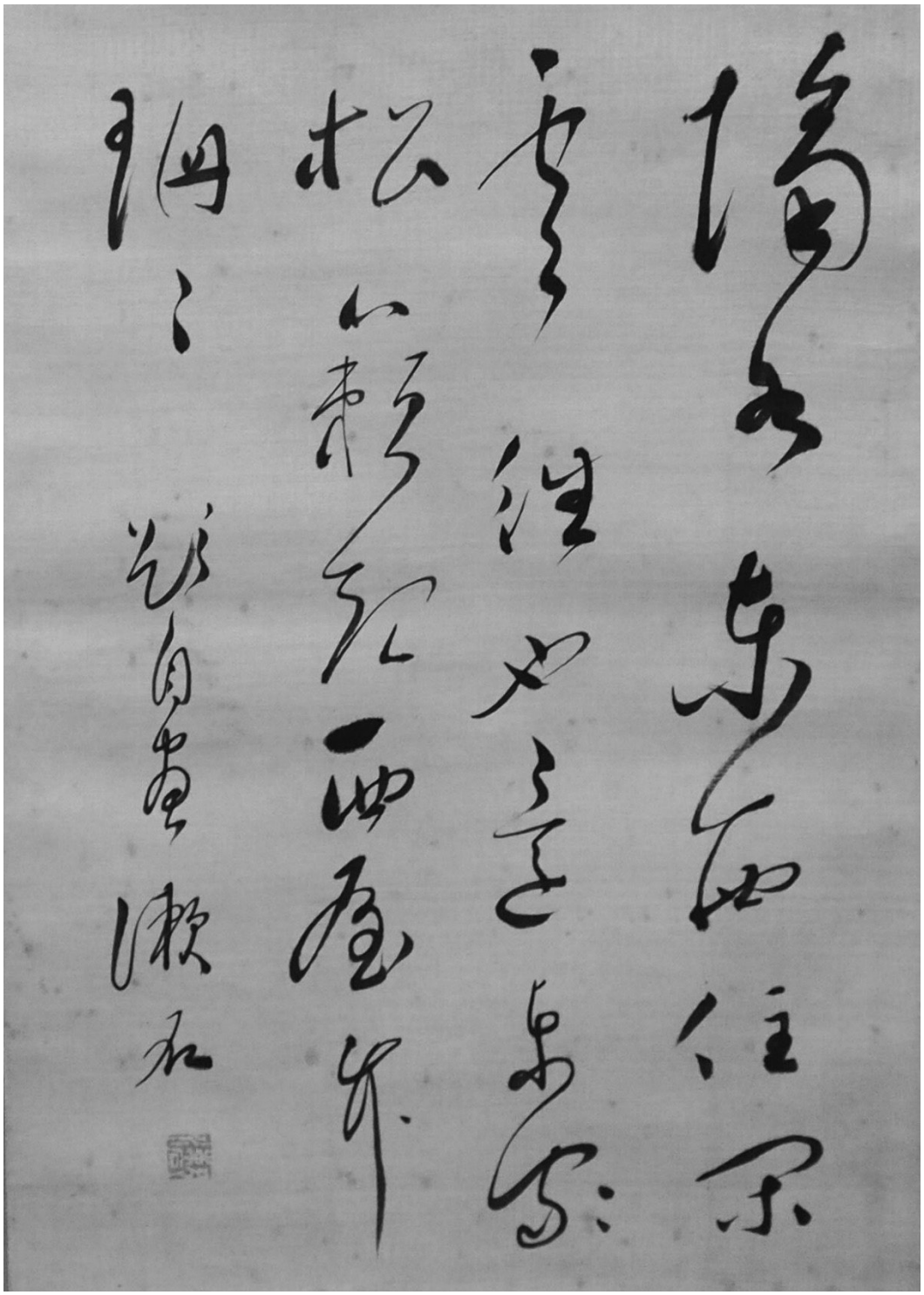
No. 6　日下部鳴鶴《七言絶句》



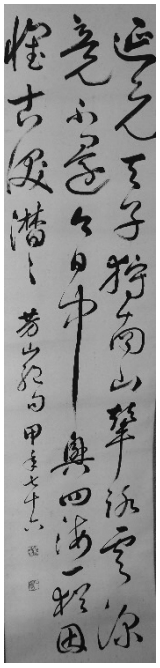
No. 7　阪正臣《和歌　ひとむらの》



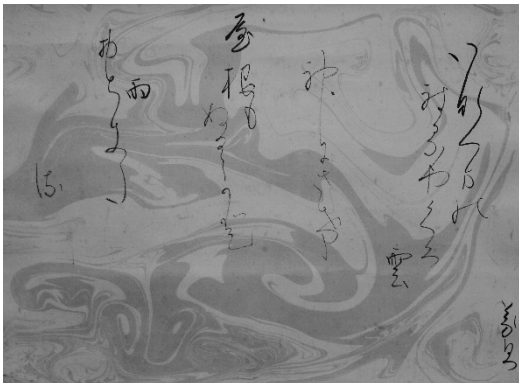
No. 8　加藤義清《和歌懐紙》（上田星邨料紙）



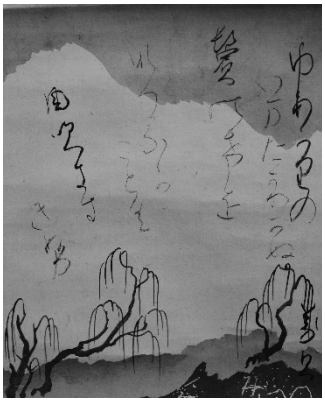
No.10　夏目漱石《五言絶句》



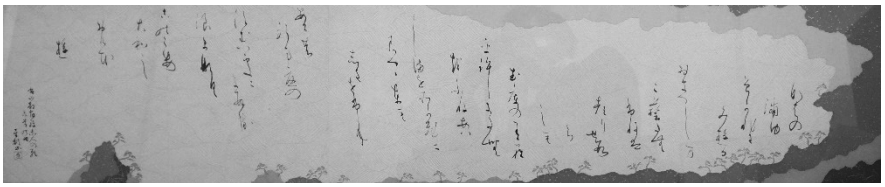
No. 9　長尾雨山《七言絶句》



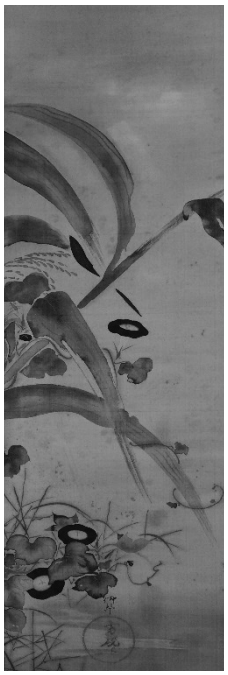
No. 11　吉澤義則《和歌　いなつまの》（上田星郵料紙）



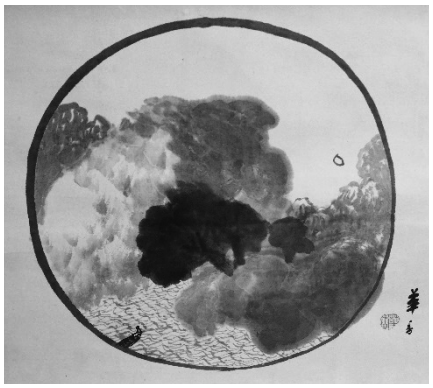
No. 12　吉澤義則《和歌　ゆふくれの》（上田星郵料紙）



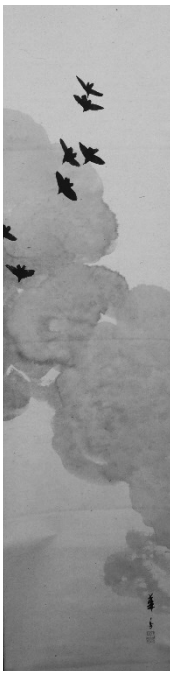
No. 13　上田星郵《万葉集　山部赤人の歌》（自作料紙）



No. 14　立林何帛《朝顔図》



No. 15　都路華香《水墨山水図》



No. 16　都路華香《曙雲群鴉図》

No.17　真野暁斎《班女図》

No.18　真野暁斎《童子逍遥図》

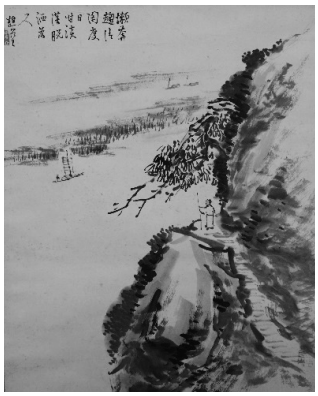
No.19　真野暁斎《羅漢図》

No.20　真野暁斎《化生水鏡図》

No.21　真野暁斎《鼈図》

No.22　真野暁斎《唐美人図》

No.23　真野暁斎《釣童図》



No.24　草刈樵谷《風帆遠望図》